

東山 鴨東

平清盛・京の大仏ゆかりの鴨東

平安時代後期、松原通の鴨川東には平清盛をはじめとする平氏の六波羅第(ろくはらだい)があり、平氏が滅んだ後の鎌倉時代には、京の警備と朝廷監視のための六波羅政府(探題)が置かれています。さらに七条通りをまたぐ鴨東には、後白河法皇の院政の舞台となる法住寺殿が造営されています。そして時代を経て、この界隈に豊臣秀吉と秀頼の、京の大仏殿となる方広寺が建てられました。

平家物語等でなじみ深い歴史の地を歩き、それぞれの栄枯盛衰の痕跡をたどります。



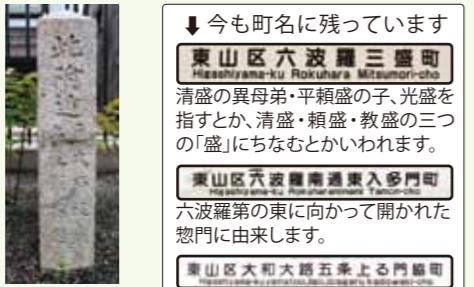
ろくはらだい
六波羅蜜寺
京の疫病平癒の為、空也によって創建された真言宗の寺院。念仏を唱える口から六体の阿弥陀が現れたという伝承から彫刻された空也上立像や平清盛坐像のほか、多数の重要な文化財を所蔵しています。境内には平清盛や阿古屋の塚(台座に石棺が利用されています)、六波羅第、六波羅探題碑等があり、周辺には平氏一族の邸宅がありました。



けんにんじょくしもん
建仁寺勅使門
平清盛の長男重盛の大波羅第の門、あるいは平教盛(たいらののりもり)の館門を移築したといわれる銅板葺切妻造の四脚門で、鎌倉時代後期の遺構を今に伝えます。柱や扉に戦乱の矢の痕があることから「矢の根門」または「矢立門」とも呼ばれています。



平清盛塚(左)と阿古屋塚



平氏六波羅第・六波羅探題府邸碑

ただもりとうろう きおんにょうごつか 忠盛灯籠と祇園女御塚

八坂神社の境内奥に忠盛灯籠があります。平忠盛は伊勢平氏の棟梁で、北面の武士として武略に優れ、胆力のある武将でした。平家物語の卷六に、ある雨の夜、白河法皇が寵愛する祇園女御の館へ通った時、前方に鬼のようないものが見え、法皇が討ち取るように命じましたが、忠盛が捕らえて見定めると、蓑笠を付け灯籠に火を灯す八坂の社僧だったという話が伝わります。法皇は無用の殺生を避けられたことを喜び、後に忠盛が祇園女御を下駄賜れます。この経緯が、平清盛の白河法皇落胤説に繋がります。

付近にはほかにも、祇園女御の館跡に建つ祇園女御塚や建礼門院ゆかりの長榮寺など、平氏ゆかりの見所が点在しています。



忠盛灯籠



祇園女御塚

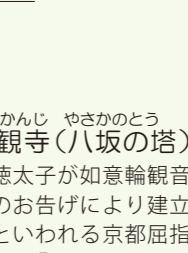


やさかじゅうじや
八坂神社

全国三千余社に及ぶ祇園社の総本社。「祇園さん・八坂さん」として親しまれ、夏の「祇園祭」、大晦日の「けら語り」が有名です。

こうだいじ 高台寺

豊臣秀吉の正室、北政所が徳川家康の援助を受けて創建しました。利休意匠の茶室、時雨亭と參亭(どちらも重要文化財)は伏見城の遺構といわれています。



ほうかんじ やさかのとう
法觀寺(八坂の塔)
聖徳太子が如意輪観音の夢のお告げにより建立したといわれる京都屈指の古寺。「八坂の塔」で知られる五重塔(重要文化財)は、室町時代に足利義教が再建し、今も東山のシンボル的な存在として親しまれています。

方広寺の七不思議

方広寺(大仏)にまつわる七つの不思議。諸説ありますが、そのいくつかをご紹介します。
(五右衛門の窓と井戸・大仏餅の看板は現存しません)

方広寺の梵鐘: 豊臣家を滅亡に導いた「國家安慶の鐘」。その内側に白い影のようなものが見え、淀君の幽靈と人々は噂していました。

専定寺(烏寺): 専定法師が、松の木の上で鳥が話しているの聞いて、熊谷直実の往生を知ったという話が伝わっています。

泣き石: 前田加賀守が奉納した石垣はあまりに大きくて、さすがの前田家もその出費に悲鳴をあげたとか、この石が元の場所に戻りたいと、夜な夜泣いたといわれています。

五右衛門ほどこの窓と井戸: 井戸の西にあった石川五右衛門の隠れ家には、井戸から伏見城に抜ける地下道があったとされ、藏の窓から貧しい人へ金銭がばら撒かれたともいわれています。

大仏餅の看板: 大仏殿近くにあった餅屋の看板「大仏餅」の「大」の字がなぜか鏡文字(左が逆)だったといわれています。



方広寺の梵鐘(鐘の内側)



専定寺(烏寺)の屋根瓦

泣き石

豊國廟
1598年8月18日に没した秀吉は、遺命によりこの阿弥陀ヶ峰に葬られました。その後、豊臣氏の滅亡とともに廟所は破壊されました。明治になり廟所が再建されましたが、墓上には五輪塔が建てられました。

いまくまのじんじゃ 新野神社

熊野信仰の急が強かった後白河法皇が、法住寺殿鎮守のため紀州熊野權現を勧請したことによるもので、境内の大樟(木指定天然記念物)は、熊野から植えられた後白河法皇お手植えの神木といわれています。



平清盛と後白河法皇

後白河法皇(当時は天皇)は保元の乱において、平清盛と源義朝の支援を受けて勝利し、その後34年間にわたる院政の基礎を築きました。その後20年にわたり、深まっていくこととなりました。しかし、その関係も清盛の力が増すにつれて、後白河法皇は清盛を疎ましく思うようになり、1177年後白河法皇の近臣によって平氏打倒の謀議(鹿ヶ谷の陰謀)がなされるに至りました。これは密告により未然に防がれ、事なきを得ますが、以後ふたりの間には埋めることのできない深い溝ができたのです。そしてその2年後、ついには清盛が後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し、院政を停止させることによって(治承三年の政変)、ふたりの亀裂は決定的なものになりました。

しかし、後白河法皇はこれまで歴史の表舞台から消えてしまうような人ではありませんでした。1181年、清盛が熱病により死去するやいなや院政を復活させ、1192年に崩御されるまで、その権勢は続くことになるのです。

年	出来事	年齢(清盛・後白河法皇)
1118	清盛出生	1 -
1127	後白河天皇出生	10 1
1129	清盛從五位下に叙される	12 3
1153	清盛伊勢平氏の棟梁となる	36 27
1155	後白河天皇即位	38 29
1156	保元の乱(崇德上皇流罪)	39 30
1158	後白河上院政開始	41 32
1159	平治の乱(平氏の権勢が確立)	42 33
1160	清盛正三位に叙される(武士として初)	43 34
1164	蓮華王院造営	47 38
1167	清盛從一位太政大臣となる(3ヶ月で辞任)	50 41
1168	清盛出家	51 42
1169	後白河上皇出家	52 43
1171	建礼門院(清盛の娘)入内	54 45
1177	鹿ヶ谷の陰謀発覚	60 53
1179	治承三年の政変(後白河院政停止)	62 53
1180	安徳天皇(建礼門院の子)3歳にて即位	63 54
1181	清盛死去(後白河院政再開)	64 55
1185	壇ノ浦にて平氏滅亡	59 -
1192	後白河法皇崩御	66 -

きょうとこりつけはくぶつかんのせきぶつづん
京都国立博物館の石仏群
博物館内に工事に伴い出土した、石仏や塔婆の欠片。方広寺の石垣を作る際に、石垣の裏込めにされたといわれています。



きょうとこりつけはくぶつかんのせきぶつづん
特別展示館(旧帝国京都博物館本館)
帝国京都博物館として1895年に完成し、1897年に開館しました。日本の建築界の草分けの人とされる宮廷建築家・片山東熊の設計によります。煉瓦造りの西洋風建築で、本館・表門・札売場及び袖振(北)・札売場及び袖振(南)が、近代日本の歴史的建造物として重要文化財に指定されています。

みづか はなづか
耳塚(鼻塚)
秀吉が朝鮮半島に侵攻した文禄・慶長の役で、戦功のしるしてある首級のかわりに持ち帰った耳や鼻を、この地に埋めて供養しました。『方広寺石塚および石塔』として国の史跡に指定されています。

れんげおういん さんじゅうさんげんどう
蓮華王院(三十三間堂)
後白河上院の院御所、法住寺殿の一画に平清盛が造進。本堂(国宝)内には丈六の千手観音坐像(国宝)を中心いて、千体の観音像(重文)など多数の仏像が安置されています。(現在の建物は1266年の再建です)

れんげおういんみなんまいもん
蓮華王院南大門(重要文化財)
秀吉造営の方広寺大仏殿の南門で建築いたるものと伝わっています。この門に続く築地塀は、瓦に太閤桐の文様を用いているため、太閤塀と称されています。

こしらかわんのううじゅうじょうじょうりょう
後白河天皇法住寺陵
鳥羽天皇の第4皇子。かつて法住寺殿内であったこの陵墓は、後白河法皇が自身の死後を守る「法華堂」を造営したところです。

こしらかわんのううじゅうじょうじょうりょう
法住寺
後白河法皇の院御所で、本尊の不動明王像は「身代わり不動尊像」と呼ばれ、木曾義仲に攻め入られたとき、法皇の身代りとなり、難を救ったといわれています。

こしらかわんのううじゅうじょうじょうりょう
蓮華王院南大門
本尊の不動明王像は「身代わり不動尊像」と呼ばれ、木曾義仲に攻め入られたとき、法皇の身代りとなり、難を救ったといわれています。

ようげんじゅうじょうじょうりょう
養源院
秀吉の側室淀君が父、浅井長政の供養のために創建し、その後焼失しましたが、徳川秀忠の正室、崇源院(江)により再興されました。伏見城の遺構といわれる血天井や、儀屋宗達の杉戸戸等が有名です。

ようげんじゅうじょうじょうりょう
新日吉神宮
後白河法皇が法住寺殿の鎮守のため、比叡山延暦寺の日吉大社を勧請したのが始まり。その後、徳川家によって破却を命じられました。その後、江戸時代になると境内の樹下社(豊國神社とも呼ばれる)には、秀吉を信仰する人々が大勢訪れたと伝われます。

ようげんじゅうじょうじょうりょう
豊國廟
1598年8月18日に没した秀吉は、遺命によりこの阿弥陀ヶ峰に葬られました。その後、豊臣氏の滅亡とともに廟所は破壊されました。明治になり廟所が再建されましたが、墓上には五輪塔が建てられました。

いまひえじんぐう
新日吉神宮
後白河法皇が法住寺殿の鎮守のため、比叡山延暦寺の日吉大社を勧請したのが始まり。その後、徳川家によって破却を命じられました。その後、江戸時代になると境内の樹下社(豊國神社とも呼ばれる)には、秀吉を信仰する人々が大勢訪れたと伝われます。

いまひえじんぐう
新野神社
熊野信仰の急が強かった後白河法皇が、法住寺殿鎮守のため紀州熊野權現を勧請したことによるもので、境内の大樟(木指定天然記念物)は、熊野から植えられた後白河法皇お手植えの神木といわれています。

いまひえじんぐう
豊國廟
1598年8月18日に没した秀吉は、遺命によりこの阿弥陀ヶ峰に葬られました。その後、豊臣氏の滅亡とともに廟所は破壊されました。明治になり廟所が再建されましたが、墓上には五輪塔が建てられました。

《 マップ目印解説 》

… おすすめルート

… 寄り道ルート

… 平氏関連の館跡(推定位置)

… 平氏関連の町名(現在)

… バス停

… トイレ

… 警察

… 公営駐車場

… 信号機

東山 鴨東



～文化財と遺跡を歩く～
京都歴史散策マップ



発行 京都市・財京都市埋蔵文化財研究所



京都市考古資料館

大正3年に本野精吾の設計で建てられた旧西陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1000点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1

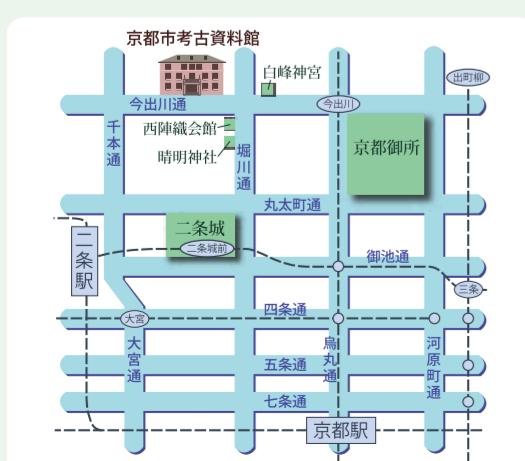
TEL. 075-432-3245 FAX. 075-431-3307

<http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/>

入館無料・月曜休館(月曜が祝日の場合は翌日)

開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

JR京都駅より地下鉄烏丸線 今出川駅下車徒歩15分
市バス 201・203・59系統 今出川大宮下車すぐ



東山 鴨東地区の発掘調査

東山三十六峰と鴨川に挟まれた地域を東山地域といいます。この地域の南半(四条より南)は古くから開けた土地で、白鳳時代から残る八坂の塔で知られる法觀寺があります。また、平安時代後期には後白河法皇の御所である法住寺殿があり、その北部には平家一族の邸宅が建ち並んだ六波羅がありました。鎌倉時代には、その六波羅に幕府の出先機関で西日本の武士を統括した六波羅探題が置かれました。桃山時代に入ると、豊臣秀吉が奈良の大仏殿よりも大きな方広寺大仏殿を建立しました。このように、時の権力者と密接に関係した地域でもありました。発掘調査は法觀寺を始め、六波羅蜜寺や法住寺殿、方広寺等多くの所で進んでいます。

① 史跡法觀寺境内

法觀寺は境内中央に五重塔があり、八坂の塔の通称で知られています。史料からは聖徳太子の創建とあり、一般的にはこの説に従っていますが、ほかに天武6(678)年や天長10(833)年創建とする説もあります。確実な史料上の初見は承和4(837)年の「八坂寺」と記すもので、その後、塔は治承3(1179)年に焼亡、建久2(1191)年に源頼朝の援助により再建、正応4(1291)年に焼亡、延慶2(1309)年に後宇多天皇の援助により再建、永享8(1436)年に焼亡、室町幕府6代將軍の足利義教が永享12(1440)年に再建したものが現在の塔です。発掘調査では平安時代の土坑や柱穴、溝等を発見しています。また、平安時代末期の整地層には大量の瓦が含まれ、その中には7世紀に属するものが多く含まれており、同時期の塔がみつかっています。

② 六波羅蜜寺境内

創建は、天暦5(951)年に造立した十一面觀音を本尊とする道場に由来し、西光寺と称したとする説と、応和3(963)年、空也が鴨川の東に御堂を建立し、西光寺と呼んだのを始まりとする説があります。境内で本堂の修理工事に伴う民俗資料緊急調査で、本堂須弥壇下から高さ8cmほどの平安時代の泥塔が8,000基みつかり、重要文化財に指定されました。近年の発掘調査では、室町時代の門・築地・柱穴・堀・溝・土坑等を発見しています。門や築地は中世の六波羅蜜寺の北を限る施設と思われます。また、西側には深さが約1.8mもあるV字形の堀があり、その西側が崖面であることから、この堀が西を限る施設と思われます。みつかる遺物の中には埴輪片があり、境内にある阿古屋塚の台座には古墳の家形石棺の蓋が転用して使われていること等から、この周辺に古墳があつたものと考えられます。



方広寺跡

京都国立博物館の旧新館とその北側には、豊臣秀吉が東大寺大仏殿よりも大きな大仏殿を造るため、天正16(1588)年より造営を開始した方広寺大仏殿がありました。建築のための部材は富士山や屋久島等から運ばれ、刀狩で集められた武器類は釘や鍛にして使用されました。大仏殿は正面の桁行が約90m、高さ約50mにも達する堅牢壮大な建造物でした。大仏は工期短縮のため、金銅仏ではなく漆喰仏の技術を採用した、高さ約20mの大仏でした。そして、開眼法要も間に迫った文禄5(1596)年に大地震が襲い、大仏殿は築地の崩壊のみでしたが、漆喰の大仏は無残にも崩れ落ちてしまいました。その後、秀吉により大仏の再建が金銅仏で計画され、築地も回廊に建て替えられ、このとき三十三間堂の修理も同時に行われました。今も残る蓮華王院南大門と太閤屏風も、この時のものです。しかし、慶長7(1602)年、金銅仏の铸造中に大仏本体から出火し、大仏殿が焼け落ちてしまいます。その後、慶長13(1608)年に再び秀吉により再建が進められ、大仏殿も大仏も完成し、開眼法要を翌月に控えた慶長19(1614)年に、梵鐘銘文が問題となり開眼法要は延期となるとともに、大坂冬の陣・夏の陣を経て豊臣氏は滅亡します。発掘調査では、大仏殿の基礎・礎石据付穴・大仏台座の一部を検出しています。また、京都国立博物館の敷地からは方広寺の南回廊と南門の礎石据付痕跡を発見しており、回廊は複廊で格式の高いものであったことがわかりました。また、西面石墨の裏込め地業の構造や南面石墨を長きにわたりみつけています。石墨には五輪塔や石仏が裏込め石として、大量に使用されていることもわかりました。



④ 方広寺大仏殿跡



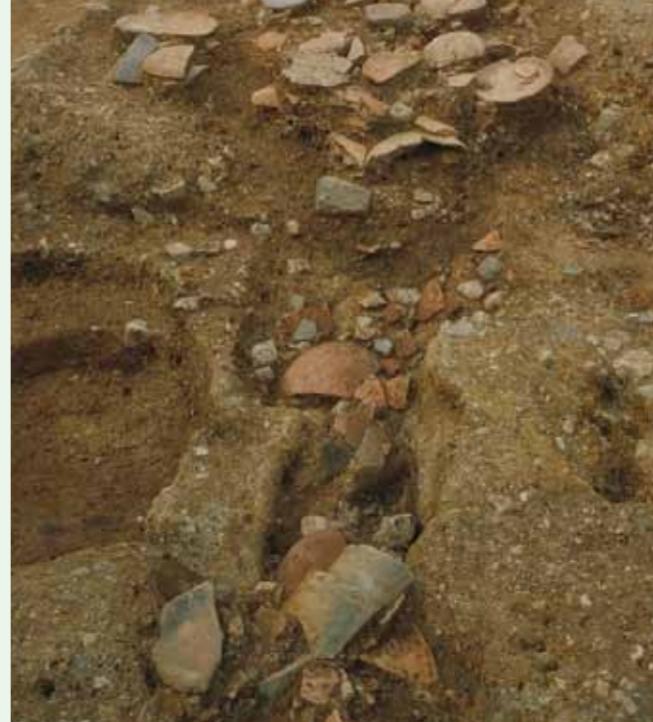
③ 方広寺跡



⑥ 法住寺跡



⑦ 法住寺殿



⑧ 法性寺跡



資料提供:財団法人京都市埋蔵文化財研究所